

# 中上健次「刺青の蓮花」論

——「路地」の象徴としての蓮——

一、はじめに——「路地」消滅前後

「刺青の蓮花」は一九八五年一月に「新潮」に発表され、後に短編集『重力の都』（一九八八年九月、新潮社）に収められている。「重力の都」の「あとがき」には「連作『重力の都』は大谷崎の佳品への、心からの和讃と思つて頂きたい」とあるように、収録された作品は谷崎の作品中に見られるモチーフに彩られている。<sup>1)</sup>

むろん中上が導入しているのは谷崎が使用した「刺青」というモチーフだけではない。本作品には「つるべ差し」という「路地」にのみ伝わる婚礼の風習が登場する。おそらくこの「つるべ差し」は、折口信夫「寿詞たてまつる心々」（『日本評論』一九三八年五月）で熊野奥の習俗として紹介された「つるべさし」を下敷きしていると思われる。当然これらのモチーフは作品に取り入れられる過程で加工され、作品中では中上の「路地」観と相まって独自の機能を有することになる。

早川芳枝

なるところで『重力の都』に収録された作品は、一般的に発表当初独立性を有する作品だったと考えられてきた。<sup>2)</sup>しかし『重力の都』において「刺青の蓮花」の直前に収録された「残りの花」は、主人公の名前や登場人物達の関係性の点で「刺青の蓮花」と深くかわりを持つていると考えられる。一九八四年一月に発表された「残りの花」には中上の作品中唯一と言つてもいい「路地」解体の様相が描写されている。これはその直前に発表された「聖餐」にも直後に発表された「日輪の翼」にも見られない。「刺青の蓮花」は直後に発表された「ふたかみ」とともに「路地」の解体と消滅を経た上で、なお「路地」を舞台としている作品なのである。本稿では「刺青の蓮花」を「路地」消滅後の作品に対するある種の布石と位置づけ、つるべさしの機能と十吉の存在意義から、蓮というモチーフについて考察する。

## 二、つるべさし

先に指摘した通り、折口信夫「寿詞たてまつる心々」には熊野奥の習俗として「つるべさし」が登場する。この「寿詞たてまつる心々」は古事記五〇番歌の解釈をめぐって書き出された論文である。「ちはやぶる 宇治の渡に さをどりに 猛けむ人し、我がもこに來む」と冒頭に当該歌を引用し、(途中大幅に脱線しているが)歌中に登場する「もこ」は「つるべさし」から婿入りの習俗について論じている。そして婿入りの儀式として紀州西牟婁郡に見える習俗と、それが熊野奥では「つるべさし」と呼ばれていることについて次のように言及している。

婚礼のあつた家に対して、土地の若い衆は実に様々な方法で、祝意を表すことになつて居る。而も其中心は、婿を新しく土地の若い衆に加へさせる儀式と謂つた意味が、非常に濃厚に残つてゐる。(中略)譬へば、紀州西牟婁郡では、角樽・飯櫃などを物干し竿の端に吊りかけ、婚家の垣の外からつき出す。其をするのは、村の若い衆で、顔を隠して後にとりに來ると、酒、料理を入れて仲人が返してやることになつて居る。其をつるべさしと言つた処も、其に近い熊野奥にはあると言ふ。

折口はこうした婿入りの習俗は起源が古く、古事記五〇番歌にも反映されていると論じているが、その当否はさておきここで紹介されている「つるべさし」について確認する。まず、「つるべさし」は共同体の外部からやつて來た婿を、土地に迎える儀式としての意味合いが濃厚であるということが分かる。嫁入り婚ではなく、婿入り婚についての言及であることに注意を要する。「つるべさし」の対象になるのは、嫁をもたらつた共同体内部の男性ではなく、共同体外部から共同体内部の女性の所へ婿に來た男性なのである。また婿と祝儀物を取りに來る若い衆は、間に仲人が入ることで互いに顔を合わせないということも指摘されている。

それでは、この「つるべさし」は「刺青の蓮花」ではどのように描かれているだろうか。折口の「つるべさし」と大きく異なるのは、それが嫁入りのあつた家に対して行われる点である。十吉が「長い竹竿の先に、節を底にした青竹でこしらえた筒吊るしての、嫁入りの家へ、祝酒もらいに行くんじや」と語るように、竹の竿の先にやはり竹の節を利用して作った筒を吊して酒を入れてもらうのである。

また、中上はおそらく彼独自のものと思われる解釈をつるべさしに対して行っている。それは「おそらく青竹の筒を竹竿の先に吊して差し出すつるべさしは、町から見れば山の裏

側の蓮池跡に出来た路地から、山の向うの町家衆の婚礼に押しかけ、振る舞い酒をかちあげようとして当時の智者の誰かが発案したものなのだ」という一文に端的に表れている。

中上がここで行っているのは解釈という名の操作であり、いわば「つるべさし」を作品世界へと導入する手続きである。つるべさしの起源が「路地」すなわち被差別部落にあるということ、つまり竿の先にくくりつけた筒に酒を入れてもらうという行為の背景に差別と被差別の関係を設定しているのである。「直に手から手へ酒を振る舞うのを避けて、長い竹竿の先にくくりつけた青竹のつるべに酒を入れる事にした」とあるように、そこにあるのは排除の論理である。

この差別と排除の論理は十吉によって「路地」内部へと持ち込まれる事になる。「十吉は若衆らがそのつるべさしを、町家の方だけではなく、路地の中でもやっていたのを覚えていた」のである。だが、十吉の朋輩であるコブラのキイヤン、銀ヤナギのトモ、フタマタのタツの三人は十吉を覚えていない。十吉は三人と共に、つるべさしのつるべを作りに行った竹藪で足に怪我をした事を話すが、その記憶は三人にはない。この点については後述するとして、本来町家という共同体に對して部外者である「路地」の人間が行うつるべさしと、「路地」内部で嫁入りのあった家に行われるつるべさしでは意味合いが異なる。

折口が紹介した「つるべさし」は共同体外から来た男を共同体内に迎え入れるという受容の方向へと向いている。一方町家衆に對して行われるつるべさしは、「町家衆」という共同体が「路地」という部外者の侵入を防ぐと同時に「路地」の者が祝酒をもらうためのシステムである。排除のためのシステムであるが最低限の回路は開かれている。それが「路地」内部に持ち込まれる時、つるべさしは嫁をもらった男を共同体外に放逐する完全な排除のシステムと化してしまう。そして男ではなく外部からやって来た女を路地の若衆のなかに迎える儀式と化してしまう。

それは十吉たち四人にとつて「ア二」にあたる若衆たちの間で起こっている。嫁をもらった若衆の一人である「ア二」に對して「嫁をもらったばかりの家へつるべさしに行かないか、とコブラのキイヤンが口を切り、三人が同調すること騒ぎが始まる。それに対してキイヤンは「酒、あるんかいね？」とつるべさしされる側に酒がない場合の事を考えるが、結局「騒がれる相手の家が酒を用意してなければどう騒ぎを納めるのか方策も考えないまま」、騒ぎは他の若衆主導で始まってしまふ。つるべさしの翌日、嫁をもらった男は「一番の朋輩だった若衆を刺し殺してその足で警察へ自首」する事になるのである。

このようにつるべさしをされた者は殺人による逮捕という

形で「路地」の外部へとはじき出されてしまった。そして、本来外部から「路地」へ入ってきた女が十吉たちの共有物という形で、「路地」内部に根を下ろす事になるのである。

十吉たち四人は以前にその嫁に來た女を狙つて夜這いを敢行したものの、男に阻まれて思いを遂げられなかつた。しかしつるべ差しの翌日に亭主が警察へ自首して居なくなると、女の元を訪れて次々に女と情交する。こうしてつるべ差しは、女と彼らを引き合わせることにつながつたわけである。

後に十吉はつるべ差しの夜を振り返り、恐ろしかったか女に尋ねるが、女はつるべ差しよりも十吉たち四人の「背中に彫つた刺青の青や朱が蛇体の鱗のように見え、蛇体が四本の女の脇で絡まり合い、眠っている気がして、身がすくんだ」と言う。しかし女は「汚点ひとつない白い肌をして」おり、やはり四人同様に蛇体の面影がつきまとう。「若衆の肌の刺青に顔をうずめられるのもつるべ差しのおかげだ」とも言っており、蛇体としての四人を恐れているわけではない。そして、さらに女は四人について次のように述べている。

四人裸で居るのを見ると背中の刺青の為に四人が亭主とは違つた人間のように自分がその四人に何事かを仕掛けてしまふ気がしたのだと言う。四人はそれぞれこの世ならざる者の転生の姿のようだった。人と神仏のあいこの

とも見えたし、人と畜生とのあいこのことも見えた。

蛇体、この世ならざる者、「神仏」あるいは「畜生とのあいこのこ」。これらはこの四人が異類であり、明らかに普通の人間とは違う者に見えることを述べている。「神仏」と「畜生」という一見正反対な存在が彼らの中に見いだされているのは、彼らがまさに「路地」世界を背負っているからに他ならない。「千年の愉楽」に登場する中本の一統の男たちが「高貴な汚れた血」「高貴な澱んだ血」を有すると表現されるように、路地とは高貴なものと穢れたものが同時に存在する場所なのである。路地の蓮池では、湧き出る清水を利用して獣の皮なめしをしていた時代があつた。そこを埋め立てて拡大した路地は蓮の花の上に出來た極楽浄土でもあつた。「路地」はまさに神仏と獣が、高貴なるものと賤なるものが同居する空間なのである。

女が「そのつるべ差しというのは、本当はしてはいけない事として忘れ去られた事だったのかもしれないと言ひ出す」と、十吉はつるべ差しを「血が吹き出、痛みにもうずく記憶」として思ひ出す。十吉は幼い頃に加つたつるべ差しの騒ぎで、足をすりむいている。しかしその現場に居合わせたはずの三人の朋輩たちはその出来事どころか十吉が存在していた事さえ記憶にない。

しかし、つるべ差しそのものの記憶は「三人の中では一等年嵩になるコブラのキイヤン」が記憶している。つまり、つるべ差しそのものが「してはいけない事として忘れ去られた」のではない。十吉本人が、いてはいけない存在として忘れ去られていたのである。

### 三、「残りの花」における「路地」と十吉

ここで、短編集としての『重力の都』に着目して十吉の存在のあり方を確認したい。なぜなら十吉という人物は『重力の都』において例外的に二つの短編に登場しており、「刺青の蓮花」の直前に収録されている「残りの花」では、彼が殺されたと推察される結末を迎えているからである。

先にも述べたとおり、「残りの花」は中上の作品中唯一、「路地」が解体される場面が描かれている作品でもある。前年には「地の果て至上の時」が脱稿され、「残りの花」の発表直前の三月から六月にかけては「聖餐」が「すばる」に発表されている。また翌年早々に「日輪の翼」が「新潮」に発表され、「異族」の一部が発表されるなど「路地」の崩壊と「路地」なき後の世界が描かれるようになっていく。

しかし「路地」そのものが解体される場面はいずれの作品にも登場しない。「地の果て至上の時」では既に「路地」が解体され、更地にされた状態になったところに秋幸が戻って

来る。「聖餐」は解体直前の「路地」を舞台とし、「日輪の翼」は解体直前の「路地」から脱出した若者と老婆の移動する過程を描いている。「異族」では「路地」は既に過去のものとなっていて、夏芙蓉の花が「路地」を想起させるものとして時折登場するだけである。

では「路地」の解体は「残りの花」の中でどのように描かれているだろうか。冒頭、「この他、暑い日が続き、縁台に咲いた草花のことごとく、萎れた」と酷暑の中、「路地」の老婆たちが育てている花が次々に萎れていくさまが描かれている。老婆たちは、花を人目につくところに配置することにこだわり、日陰に移動したり、日よけをかけたたりしない。花が萎れていく様は、「萎れた花弁の内側に溜った死の匂いが溶け出して、あたりに漂い出しそうだった」が、老婆たちは日陰に腰を下ろし、「じりじりと白い日に焼かれて死んでゆく花を、見て楽しんでいよう」に手を施さない。

安全地帯にいて亡びていく者を見つめるような視線は、作品全体の語りの姿勢にも共通する。直後唐突に「路地」解体の第一段階として「路地の角の家が、道路の拡幅工事のため取り壊しの作業に入った」ことが語られる。そして、「はつきり男のものと分かる」「古い骨」が出たという噂が流れるが、ここがこの作品の時系列における現在と見られる。その後、続く荒くれ者の十吉の話が、そこからどれぐらい遡るも

のなのかは分からない。ただ十吉が、山仕事からの帰途に出会った盲目の女を連れ帰って「角の家」に住んだと作品の中に盤以降で明かされるだけである。

その「角の家」から出た「古い骨」が十吉のものであるかどうかは作品中で明らかにされない。また、道路拡幅工事によって「角の家」は解体されるが、「路地」の家すべてが取り壊されるところまでは描かれない。「路地」解体とともに現れた「古い骨」は秘密裏に埋め戻され、十吉は姿を消したまま戻らない。「路地」の行く末も十吉の生死も曖昧なまま作品は閉じられている。

「路地」解体の矢先に現れる「古い骨」と、それによって呼び起こされる十吉の話は、「路地」と十吉が不可分のものであることを印象づける。では「路地」とはどのような場で、十吉はどのような存在なのだろうか。「残りの花」で描かれる十吉と、彼が連れてきた盲目の女の関係からそれを明らかにしていきたい。

十吉は里心から飯場仲間と別れ、「サカリのついた犬のように身の置きどころがない」思いで伊勢長島町をふらふらしていた。そこで出会った盲目の女に惹かれ、女を連れて里である「路地」の「角の家」に戻る。遊び仲間やその手下を使って大掃除をし、数日間酒宴がもたれた後ようやく彼らは二人きりになるが、その後も遊び仲間が集まれば酒を出しても

てなす日が続く。

一方十吉と女は昼夜を問わず情交し、新所帯のような生活を始めるが、十吉には所帯を持つていくという意識はない。女は金の切れ目とともにその生活が破綻することを予感しつつも、その生活を変える様子を見せない。十吉が山仕事にかけ、夕方帰ってくる生活を始めても、洗濯や水汲みなどの家事をこなして生活を維持していく。ついには十吉のいない間に十吉の遊び仲間と情交し、十吉が姿を消した後もそうした関係を続けていく。

十吉によって共同体の外から共同体の中へ連れて来られた盲目の女は、共同体内部の他の男と関係を持つ。一方女を連れてきた十吉本人は、(何者かに殺されて埋められてしまったという確証はないが)「路地」から完全に姿を消してしまふ。つまり共同体の外へ放逐されてしまった。これは「刺青の蓮花」における十吉と若衆の関係とは対称の関係にある。「刺青の蓮花」のつるべ差しを使って解釈するならば、「残りの花」の十吉は女を共同体の外から内へ連れ込み、共同体の中の男によってつるべ差しをされている状態であった。そして彼らによって(あるいは女によって)、共同体の外へ追い出されてしまったと推測できる。

むしろ「残りの花」と「刺青の蓮花」の間に十吉という名の主人公以外共通するものはなく、二つの作品が時間的前後

關係を持ったつながりのある作品という裏付けはない。しかし同じ名を持つ主人公を登場させて対称となる關係性を導入している以上、「刺青の蓮花」が「残りの花」のテーマを変奏している可能性は高く、少なくとも前者では表現しきれなかったテーマを引き継いでいると推測すべきである。

「残りの花」において十吉は、前述のとおり「サカリのついた犬」のような身の置きどころのなさを感じている。その上で「十吉は昼間も女の姿を見ているだけで、自分が大きくなだめられる気がし」ている。しかし「いつも胸に湧いて出るふつふつと音をたてるような所在なさに突き動かされ」て女を連れてきたものの、結局は「盲いた女は自分の所在なさを一層、くつきりと浮かびあがらせる」ことになるのである。

女によつて何かがなだめられるとしつつも、むしろなだめられることのない思いが作品中では強調されていく。「闇の中にいると、十吉には眼が見える男であることが業のように思えてくる」のであり、ついに十吉は次のような境地にまで至っている。

光りのない家の中で、(中略)十吉の中の男もまた盲いている事、光りのない闇の中をぐるぐる渦巻き、かたまりとなつてつきあがり、闇の中で熱となつて溶けている

と知り、いつそ自分も、(中略)盲いていけばよいものを、と思つた。

十吉本人は盲目ではないが、十吉の中の男は盲いている。そのように十吉自身に自覚されている。十吉は「自分が下等な獣のような物にすぎないと思」つてもいい。それは裏返せば、たとえ盲目でも女の中の女は盲いてはいないということである。十吉には見えないものが女には見えているということである。十吉は盲目の女によつて情欲が喚起されることで所在なさを感じているが、十吉がそうした思いを感じるのはいずれではない。

女はたらいに水を張り、石鹼の泡を立てて物を洗い、すぐのが、十吉の女としての自分を人にも自分にも納得させる事のように思っているようだし、十吉の方はそれは妙に居心地が悪い。

十吉は盲目の女が普通の女として振る舞おうとしていることに、所在なさと居心地の悪さを感じているが、一方で「十吉はそんな女を見ていると、体がうずいた」とあり、この所在なさこそが情欲を喚起するものでもあることが分かる。十吉は女に惹かれながらも、盲目の女と彼女の「生まれ在所」

を離れた「路地」で生活していく事は不可能だと感じている。当然ながら、女と所帯を持つつもりはない。

それでは女はどのようなもくろみを持っているのか。女は他の男が自分を見て欲情していることを「何から何まで知っているのに、昼間の見える世界は、十吉に頼っていれば安堵出来るというように」十吉の言葉にうなずき、闇の中では「やつと自由になつたように十吉を包み込み声をあげる」。女は「破局がすぐ傍に来ていると分かつていた」が、炊事や洗濯、水汲みなどの火事をやめようとはしない。それは彼女にとっての破局と十吉にとっての破局が全く違うものであったからに他ならない。

十吉にとっての破局は、金を稼ぐために女を家に置いて飯場に出かけていく事であり、それは盲目の女を見捨てていくことに他ならない。しかしそれは、女にとって必ずしも生活の破綻にはつながらない。たとえ十吉がいなくなつても情交することと引き替えに面倒を見てくれる男がいれば済む話である。先行研究で「重力の都」とともに指摘されてきたことだが、盲目の女にとって代わりとなる男はいくらでもいるのであり、角の家から出土した骨はそのことをわきまえぬものなれの果てと言える<sup>3</sup>。

女の魅力によつて「盲目」となつた十吉が自らのそうした立場に気づくことはなかった。「盲目」にならなかつた女は

金の切れ間が縁の切れ目とばかりに十吉以外の男と関係を持ち、新たな男たちと今までどおりの生活を送っていくのである。女と若い男たちの笑い声は「路地の中に不吉な響きで流れ」、「路地」に住むものたちは不吉な想像をする。だが、彼らが待ち続けた不吉なことは明るみに出ないままに終わる。

女は自分の里にあつたものを移植したのか、家の庭に小菊を何本も植えた。そこに殺された十吉が埋められており、後に「路地」が解体される際に白骨として現れ出ることになるのかもしれない。作品はただ「小菊が花を開き、家の方から路地に匂い立つと、老婆らも、路地の者らも、十吉と女のままなまました性の匂いがかがされているようで、頭が痛くなつてくると苦情をこぼした」とあるだけで閉じられており、すべては読者の想像にゆだねられている。

女が外部から持ち込んだ小菊は、確かに「路地」に根を下ろした。菊は天皇家の象徴であり、中上の言葉で言い換えれば、天皇とは「路地」と同じく日本の外部に位置する存在である。「路地」という日本の一方の外部が解体される場面でもう一つの外部の象徴である菊が呼び込まれていることは示唆的である。「路地」という社会の下方に存在する被差別空間が解体される時、当然上方も変革を余儀なくされる。中上は路地の解体消滅と引き替えに、差別被差別を生み出す日本の自然とそこに安住するものに対する警報を発したのである。



かつたか。<sup>(4)</sup>

「残りの花」は老婆たちが手を施さないために死んでいく草花の描写にはじまり、なまなました性の匂いを放つ小菊に老婆たちが苦情を言ったことが語られて終わる。作品の時系列における現在と十吉たちの物語現在の間に、どれぐらいつの間隔があるのかは分からない。掘り起こされた「古い骨」が十吉のものであるとするなら、作品の現在からみて古い話にはなると推測する他ない。しかし「路地」解体時に暑さで花が萎れていくことを嘆いていた老婆たちが、十吉が生きていた時代にも老婆として存在し、女の植えた小菊の匂いを嗅いで苦情をこぼしているかのような語られ方である。むろん作品における現在は、あくまで暑さで花が萎れていくさなかに「路地」が解体される場面であり、小菊もそうした運命にあることが推測される。

だが、萎れた花のように「路地」は死なない。結末部の語りが時間的な先後関係を曖昧にしているように、語られることよって存在し続けることは出来る。たとえ形を変えようと「路地」が「路地」として存在し続ける可能性はある。そのことを追求するために蓮花を背負った十吉を「刺青の蓮花」において復活させたのではなかっただろうか。

#### 四、おわりに―「路地」の象徴としての蓮の花

十吉は十の頃に路地を出て、背中に朱の蓮花を彫って他所から戻ってくる。ただ「他所」とあるだけで、どこであるかは作品中触れられていない。それに対して「朋輩の同じ等寸の三人」は「いずれも近畿一円に根を張る暴力組織の一員に身を陥し、背中や腕にてんでな刺青を彫っている」が、「三人共、それぞれの暴力組織から一切おとがめなしに、足を洗って戻ってきた」とあるように、いわゆる暴力団に所属していた事がわかる。そして彼らは十吉にはない綽名をそれぞれ有している。彼らと十吉はほとんど年が違わないのに、彼らには十吉が「十の歳まで路地にいたその記憶がない」。

十吉の主張で「遊び仲間の中に、色の極端に白い子が居た気がしはじめる」ものの、「十五の齢で生きる活力を尽い果たしたように死んでしまった」と思いつくだけである。十吉はまるでそこにいなかった人間であるかのように捉えられ、死の影がつきまとう。

むろん「残りの花」の主人公とは同名異人として設定されているとも考えられるし、仮に同一人物としても、作品内を流れる時間の先後関係では、「刺青の蓮花」を先とする方が妥当だろう。それでも十吉を、路地の象徴である蓮の花を背負って物語の中から呼び戻された人物と捉えることはできる

のではないだろうか。

路地にいた記憶がないにもかかわらず、十吉が彼らの中にとけ込んだのは背中彫った刺青によるところが大きい。女から四つの蛇体と見なされるように、刺青によって十吉は三人と結びつけられる。そればかりではない。「十吉が他所から戻り、路地の若衆の中にたちまち溶け込み、替嘆の的になったのは、そこで見せた背中の蓮花の刺青のせいだった」とあることから、三人以外の路地の若衆からも刺青によって仲間として認知されている事が分かる。

しかし、この蓮花の刺青は決して共同体に溶け込むための切符のような役割を果たしているわけではない。「十吉が刺青を撫ぜる手が気色悪く不平を言おうものなら、「われ、ちよつとええ物、彫つとると思て」と小突かれた」とあるように、替嘆の対象となる刺青は同時に攻撃の対象となる。また女は性の戯れのなかで十吉を縛りたがり、理由を問われると「何か赫い刺青みとつたら、そんな気になつてくる。さつきもわざと爪立てたつた」と答えている。このように刺青が攻撃対象となることは、作品末尾で「ささいな事で喧嘩になつたというより、十吉の蓮花の緋に眩んだように」喧嘩が始まつた事からも裏付けられよう。

刺青とはいわゆるヤクザやチャンピラのあかしであり、刺青を有する者からは仲間として認知されるためのしるしとなる

が、同時に一般市民社会からは排除の対象となる。また同時にこの刺青は性の象徴として捉えられており、それは先に触れた女の「赫い刺青みとつたら、そんな気になつてくる」という発言にも見て取れる。刺青は女の情欲をあり、やがて十吉と「昼日中から男女の睦み合」いを繰り広げる事になる。十吉自身「女の女陰に入っていく一物の感触が、自分の背中の刺青の蓮花の花弁のもののような気がし」ているのである。その他「俺の刺青のせいで、はよいと言うんかい」という十吉の問いかけに、フタマタのタツが「おうよ」と答えていることもその傍証となるだろう。

蓮や蓮池は、中上の後記作「品群」においてしばしば「路地」と「路地」の起源の象徴として現れている。たとえば『千年の愉楽』では「路地」が拡大する過程で蓮池が埋め立てられており、仏の花である蓮の池の跡に立つ「路地」は、一種の極楽として捉えられている。しかしそこは同時に皮なめしをした場所でもあり、聖なるものと穢れたものが同時に存在する豊かな物語空間でもあった。また「日輪の翼」では、蓮池は「路地」の最初の人が暮らした場であり、「路地」開闢の場として一種の神話空間となる。また「讃歌」において上野の不忍池が「路地」を想起させる場となつたり、「路地」が「蓮の池の故郷」と言い換えられたりするように、「路地」なき後に「路地」を可能にする一種のトポスともなる。

「奇跡」においても蓮花は「路地」を象徴する花として登場するが、「路地」以外の場所にある蓮池が「路地」を想起させるモチーフとして登場するのは、「日輪の翼」をうけた「讃歌」からである。十吉が刺青として路地という物語の起源を背負う姿は、「異族」において満州国という物語とともに青あざを負った男たちの姿とも重なり合う。十吉は「路地」という物語を背負い、つるべ差しという不吉な儀式によってまさに「路地」の外部へと放逐されようとしているのである。

このように「刺青の蓮花」は、「残りの花」で「路地」の消滅を経験した上で、「路地」消滅後に「路地」の物語を可能とするモチーフを生み出していった作品であると言えるのではないだろうか。作品結末部で、十吉は止まることなく流れ続ける血におびえ、震え続けている。それはとりもなおさず、留まることなく流れ続けなければならない「路地」の物語と、それを背負ったものたちの恐怖心の表れではないだろうか。血とはまた物語であり、物語を生み伝えていくものでもある。

「路地」という場を失った物語が放逐された先に、一体何があるのか。中上はこれ以降、際限なき移動をテーマとした作品を生み出している。「刺青の蓮花」がつるべ差しを始める場面で高まった緊張とともに閉じられるのは、決して終わ

ることのない模索の時代を前にした作者中上の緊張感を体現しているかのようである。

#### 注

- (1) たとえば、表題作「重力の都」「残りの花」「ふたかみ」は盲目、「刺青の蓮華」は刺青、「よしや無頼」には盲目と刺青の両方のモチーフが現れている。
- (2) 「重力の都」所収の「ふたかみ」は、『文學界』一九八五年二月号に「現代日本の短編」という特集の一環として発表されている。
- (3) 金井景子「『重力の都』―棘のある和讃」(『国文学解釈と鑑賞別冊 中上健次』一九九三年九月)では、「『残りの花』は『重力の都』の後日譚ともいべきものだが、ここに出てくる男の遺骨は、身のほど知らずに女を奪い合った依代どもが相打ちをした結果の産物だといえるかもしれない」と指摘されている。
- (4) 部落青年文化会連続公開講座で中上が行った講演では、第一回講座「物と言葉」に「自然なるものが差別を作っている。自然なるものが被差別部落を作っている」という発言がある。ここでいう「自然」とは自明の前提として意識されることなく存在する枠組みを指しており、それが差別を生み出している」と指摘している。講演録は、柄合行人・渡辺直己編『中上健次と熊野』(二〇〇〇年、太田出版)に収録されたものを参照した。